

しに始まる此の年天下百姓多く疫癘になやまされし故なり。(完)

◎我が國戰國時代の女性

文科三年 内田 木 清

この話を致します前に大躰戰國時代とは何時頃をさすかを定めたいと思ひます。これは人々によりまして色々に定められて居りますがここでは足利織田豊臣の時代を漠然と戰國時代と致して置きます。

この時代に於ける社會の狀態は如何であつたかと申しますと、よく言はれて居ります通り麻の亂るゝやうで京都の荒廢も愈々甚しく畏多いとであります。皇室の式微はその極でありました。又一方地方の様は如何と見るに内亂が常に絶えませんでした。それ故此の時代には文學に於ても道德に於ても一般に振はずして文學史上倫理史上の暗黒時代といはれて居ります。しかし亂世には新英雄が嶄然として其の頭角をあらはすもので支那戰國時代と同様にこの時代にも新英雄があらはれました。そしてそれは多く微賤なる者の中から出ました。秀吉の如く早雲の如く。

扱此時代を一貫して居た思潮の一は下剋上といふ事であります。群書類從に建武中興頃の落首が載せてありますが既にその中に下剋上といふとが歌つてあります。これが足利十五代を通じての思

想界の潮流をなして居ります。之は門閥と實力との競争の結果のやうに思はれます。以前には御承知の通り門閥が重んぜられ建武の中興の時にも尊氏が忠臣正成よりも義貞よりも賞重く社會上の地位もその上にあつた事は一は其の門地が高かつた故であります。かく前には門閥が重んぜられたと同時に社會上の地位も重んぜられて居りましたが、實力の伴はぬ地位は漸次其の効力を失ふに至るは當然の事で何時か實力優勝の時代があらはれねばなりません。實にこの戰國時代は實力優勝の時代であつて經驗あり實力ある者が下層民間に沈倫して居た爲めに新英雄は下層民間より多く興り自ら下剋上の有様をあらはしたのであります。只かゝる間にあつて足利氏が十五代の長命を保ち得た事は不思議に思はれますが、之は足利氏に實力がなかつたからで若し今少し實力があつたらあつと早く花々しく碎け散つてしまつたか又は戰亂の世を現はさすにすんだかも知れません。

この時代には人々互に競争し自利のみを計り親戚でも主従でも自利のためには劍の下を潜るといふ事を僻けませんでした。世のもつれを一層甚しからしめた慶仁の大亂は勿論當時は戰爭を一々しらべて見ると大抵かかる關係ある者の間に起つたものであります。又素性を洗へば只の油賣の勘九郎であつた者が目をかけてくれた主人の永井永弘を殺し同僚の齋藤氏をたほして齋藤秀龍と名乗り遂には又主人土岐頼藝をも追ひ出した事は實に君臣間の結合力を失うた適例といはねばなりません。又この時代には人生の大事たる結婚も權略的に行はれ悲惨な生涯を送つた婦人も少なくないのであ

ります。何しろ當時は唯競争の時代でありましたゆゑ諸侯は争闘必須上外には權謀をめぐらすと同時、心に民力の休養に用ゐる實力の發展を圖りました爲め大族治下の邑落は漸く榮えて小康を得るに至りました。

しかし大躰に於て此の時代は前に述べました通り總ての點で暗黒時代と言はれて居る程で社會の道德も一般に衰へて居りました。従つて女道も衰へて居りまして後妻打などいふ事が盛んに行はれて居りました。斯様に好ましからぬ状態にありました時にある一部の社會には實に麗はしい輝を見る事が出来たのは喜ばしい事ではありませんか。其輝といふのは道德上の光であつてかの鎌倉時代の女子の貞操に加ふるに武士的の性質を帯びて來た事であります。即是等の女子の特性は貞烈といふ言葉で表はし得るでありませう。如何にして當時のある女子の間にかゝる現象を見るやうになつたかと申せばそれは武士の間に練磨された武士道の影響によつてであります。由來戰國時代は武士道の最旺盛を極めた時代で或る人の如きは元龜天正の間を以て我が國士道の最大盛時と稱へて居ります。此の武士道は如何に發達したものでありませうか私は其の近い源は鎌倉時代にあると思ひます。但足利氏の初世に衰へかけましたが戰爭といふ嵐によつて或る社會にはより麗しい武士道が復活したのであります。その特色を一々あげ盡すことは出来ませんが、死すべき時には潔く死につき死すべからざる時には一時の辱を忍んでも死を急がない事即生死唯義によるといふが如き、又

廉潔で二君に仕へすといふ節義のある點、自重心厚く且禮義を辨へ毅剛勇武で決斷にとみ度量の廣い事など先づ主なる點でありませう。又かゝる雄々しい方面ばかりではなく優しき文學の道にも士を愛する温い情にも富んで居りました。即ち當時の女道が男子の間に現はれた神州の正氣に影響せられて鎌倉時代よりも一層烈しい華やかなものとなつて女子の間にあらはれて來たのであります。私共は當時の或る女子の間に貞烈といふ事の行はれたのを別段怪しまないのであります。此の様に立派な女子を世間では如何待遇して居たでせうか。實にその父又は夫はその女又は妻に對して絶對の權力を有する者であつたのでした。女子はこれにどこまでも服従の態度を取つて居りました。こゝで一寸西洋の武士道隆盛時代即十二、三世紀頃の女子の位置有様を見ますと前述へ來りました我が國のそれは大いに趣を異にして居ります。西洋の武士道はジャーマン人種の特性に基いて出來たもので強きを挫き弱きを助くる事を目的として居りました爲め女子が尊長せられ武士道發達に伴うて女子の位地が愈々認められて來たのであります。其の時にはかの婦人の人格は立派なものであります。

前述のやうに武士道の盛時と婦人の位地待遇とが東西兩洋に於て相反して居るのは、女子の側にも違つた點あり又いろ／＼事情の異なる點があつたからでもありませんが一にはその武士道の本義とする所異り又我は彼と異つて時戰亂の世で女子を手足纏ひ位に思つて居たからであります。日

本の女子が男子の絶対権利に服従して反抗しなかつたといふことは之を意氣地なしとのみ笑ひませうか又女子の爲めに悲しむべき事であつたとのみ致しませうか。私はさうと許りは思ひまん。一躰完全圓滿なる社會生活は物の調和によつてなされることと思ひます。即男子は其の特性たる剛を以て生活し女子は柔を以てこれを調和して行かねば圓滿な社會生活はなりたぬと考へるのであります。それでこの時代に女子が若し男子の壓制に對して反抗したなら恐らく皆の不幸であつたに違ありません。反抗することなく女子が極めて柔順であつた事はつまり完全なる生活がなされた事をいふのでありませう。而も當時の女子が壓制をうくるものにあり勝な卑屈未練の弊に陥ることなく氣力ある性格を有して居たこの事は實に立派な事と思ひます。

我が國史の上に異彩を放つて居る英雄は豊臣秀吉であります。其の夫人藤井氏は藤吉郎の卑賤なる時に嫁ぎました。常に清貧に甘んじ夫を敬愛しよく之を輔けました。秀吉が高位高官にのぼるに及びましては常に昔を忘れ給ふなごゆるみかゝる心を戒め秀吉の死後には剃髮して秀頼を視る事己の所生の如く親族諸將をしてよく之を輔けしめました。中村一農民の子たる秀吉が當時戰亂の世とはいへ、特に抜き出て居る才略があつたとはいへ、關白にまでもものぼり天下に號令し海外に兵を進め得たのは八重子夫人の内助の功の少からぬものがあつたからでありませう。

又武田勝頼の夫人は北條氏政の妹でありました、が勝頼が信長のために攻められて新府城をのれ

が柏尾に姦臣小山田義國に拒まれ、天目山麓田野で最後の決戦の開かれました時にその生家なる小田原に歸れとの夫の命を否み戰の最中に従容として文を認め髪を少し切つて中に巻きこみその奥に次の一首をかきそへて小田原の生家に送りました。

黒髮の亂れたる世を果しなき思ひに消ゆる露の玉の緒

又その母に

残りなく散るべき春のくれなれば梢の花の先立つぞうき

と言ひ送りまして尙夫を勵まし、懷劍胸元につき立て、死についたと言ふ事であります。

尙例をあげますと幸田彦右衛門の母などは賢母の一人であつたと思ひます。柴田勝家が瀧川一益織田信孝等と兵を擧げました時、に信孝の母坂氏は殺されましたが彦右衛門の母は殺されませんでした。それは秀吉が彦右衛門兄弟を味方に引き入れんがためであるとの事を知りまして、自分故に兄弟をその主人たる信孝にそむき不義に陥らしむる事があつてはならぬとて書を送つて兄弟を勵ましましたその要は

凡人の臣として君に忠なるは之天地の大義に候ぞかし人の親として子に先んずるは亦古今の常道にこそ候はめ我れ君のために死せん事是人臣の大義なり汝に先立ちて逝かむ事亦古今の常道たる事を思ひ忠を勵み義を盡くしくれくも母の故に二心を懷き給ふべからず。

といふ事でした。もとより忠義心にあつき兄弟は此の書によつていかに勵まされた事でありませう。親のために君にそむき孝の爲めに忠を忘るること無き様その子の去就を誤らしめなかつたのは實に賢母たるの資格が備はつて居る者といはれませう。尙此の外にも細川忠興の妻の如き貞烈な行爲をなした者が少なくないのであります私は是等の人の事を聞く毎に立派な事でありますとは思ひましたが今までは只昔そらいふ人があつた美くしい事だ位に普通の御話として聞いて居りました。然るに今度の乃木大將夫人の事がありいろ／＼の感を持ちましたが従容として死につくこの事がいかにもむづかしい事であるとの事を考へましてからは是等の婦人の行爲が實に／＼立派なものであるとの感が切になつて参つたのであります。實に貞烈といふ徳は日本の女徳として立派であるばかりではなく世界の女徳として望まじきものでかゝる性格は世界の女子の模範とすべき女性でありませう。それがこの總ての方面に於て暗黒時代をなすと言はれて居る戦國時代或る社會の女子の間に顯著として見る事の出来るは世界に對して日本女子の誇とするに足る事と思ひます。(完)

◎朝鮮の 話

文科一部二年 安 永 み ち

私は大きなお屋敷を御門の外から覗きましたやうに朝鮮の山朝鮮の人朝鮮の街を見て参りました。

た、で山と申しますのは築山の片端で人といへば玄關番か下男位のものでございます。昨年暮には上野で拓殖博覽會が開かれましたので新領土についてお持ちになつた豊富な知識は更に鮮かになつて居ります、この時に私風情の者の申し上げることは全く蛇足でございます。

で私は歴史とか地理とかいふ立場からでなくほんの見たもの聞いたものについて紙屑屋が道傍の紙を拾ひますやうにお話いたします。従つて順序もなく、碌なものでございませぬ。

私が馴染となりました土地は釜山でございます。多くの渡鮮者が釜山の埠頭で第一に驚きますやうに異様の人間に疲れ切つた私の心は波立ちました。それはチゲといふ荷物運びでございませぬ。

釜山は朝鮮の玄關であり棧橋は釜山の玄關でございます、玄關には身分相應もしくは以上の品物を置きますやうにこゝにも目星しい建物は大抵集つて居ります。

この棧橋には下關或は門司から來ました二千噸位の船が二つ横づけにされてることもあり一つ残されてることもあります、こゝから釜山のステーション迄約一丁位離れて居りますこの間にある小さなステーションは南滿州鐵道の特別な停車場で長春行の一等急行列車が毎週三四回つゝ割合に上等のお客様をのせて北へ北へと走ります。

ステーションは赤い煉瓦造で樓上はすつかりホテルになつてをりまして十五六圓位からだん／＼にムいすまごか、皆様のお宿に乏しくございませぬ。